

平成25年度 第3回宮崎県社会教育委員会議 議事録

期日：平成25年11月19日（火）

午後3時～5時

会場：宮崎市立小戸小学校 会議室

テーマ1 みやざき「親学び」プログラムの作成について

- 保護者や祖父母、地域の方が楽しく気軽に学ぶことのできる学習プログラムはどうあればよいか。

議長 みやざき「親学び」プログラム（原案）を使った家庭教育学級を参観させてもらった。感想や気付かれたことなど、意見を願います。

委員 誰でもできるプログラムを目指しているが、実際に指導された事務局の感想はどうか。

事務局 今回は、いろいろな「ほめ方・しかり方」を知ることで、気付きを共有することを目標とした。また、参加者同士のつながりができることもねらいとした。

委員 参加者からは「楽しかった。また参加したい」「このような学習があることを他の人にも伝えたい」といった感想が寄せられた。このプログラムを広げていくことが課題である。

議長 今日の参加者は20名程度であったが、参加者が100名になっても同じ手法で実施できるのか。また、テーマが変わっても講座の進め方は同じなのか。

事務局 8月に開催した「県民総ぐるみ教育フェスティバル」では、約70名の参加者で実施したので対応は可能である。講座の進め方は基本的には同じである。今日は、ロールプレイが効果的であると考えて取り入れた。また、適切な絵本を準備することができたので、最後に読み聞かせで終わることにした。

委員 講座の最後に取り入れた絵本の読み聞かせが効果的であった。答えを出すのではなく、みんなを感じていくことがよいと思った。どのテーマでも絵本を活用することは可能か。活用できる絵本のリストができるとよい。

事務局 宮崎ならではのプログラムとして、絵本の活用を考えていきたい。県立図書館では、家読に使える本のコーナーを設置している。テーマに合った本が準備できるのではないかと考えている。



委員 今日の講座は60分の設定であったが、導入に時間を費やした。時間配分についてどう考えているのか。また、リアルな場面設定ができると現実的な意見が出てくると思った。

「Iメッセージ・YOUメッセージ」など、初めての言葉については、丁寧な説明が必要だと思った。今日は4人グループで活動したが、その意図は何か。

事務局 活動時間については、導入で時間を費やしたが、ここで参加者同士が打ち解けることが大切だと考えている。場面設定については、もっとリアルにしたいと思っている。グループの人数については、ペアを組んでロールプレイを行い、それをお互いに見ることができるようにしたいと考えて4人組とした。

委員 今日の参加者の様子を見ていて、意図されたねらいが十分達成されていると思った。事前の打ち合わせもよくされていた。

ロールプレイングはジュニアリーダーの研修でもよく活用される手法である。グルーピングの際に、必ず男性が入るようにするなどの手法も参考になると思う。

自分もロールプレイングの経験は少なかったので、今日の参加者にとっても新鮮に感じたと思う。

副議長 プログラムの有効性は感じたが、これを広めていくときに、ファシリテーションの技術を身に付けておく必要がある。プログラムの作成と同時に講座を進める人の養成も進めていくことが大切であると思う。

事務局 当初の予定では、プログラムの作成とファシリテーターの養成を同時に進めることにしていたが、予算の都合もあり、本年度はプログラムの作成を行い、次年度以降、ファシリテーターの養成を行うことにしている。

議長 次に、各対象に応じたプログラムのテーマについて、事務局より説明をお願いします。

事務局 前回、委員の皆様からいただいた意見をまとめると、

- 地域のつながりが残っている、豊かな自然や文化があるなどの宮崎のよさを生かし、宮崎の風土や土壌にあった宮崎ならではのプログラムにする。
- 親子が地域とつながることのよさを再認識できるようなプログラムにする。
- 親や将来の親世代だけでなく、地域が子育てをサポートできるように、祖父母・シニア世代や地域の方も対象にしたプログラムを作成する。

この分野については、全国的にもあまり開発が進んでいない分野になる。

- 一人親の家庭も多いことなどから、男女の協力についてのプログラムを作成する。
- 生活リズムやメディアの活用、将来の夢や希望など、子どもが自立できるようなプログラムを作成する。

という5点に集約された。

そこで、プログラム①<幼児から小学校下学年の子どもを持つ親向けのプログラム>では、「親子のコミュニケーション」「家庭のしつけとルール」「子どもの安全」「子どもの個性と夢」「地域とのかかわり」という5つのテーマを設定した。特に、「地域とのかかわり」を入れているのが特色である。

プログラム②<小学校上学年・中学生の子どもを持つ親向けのプログラム>についても5つのテーマを設定し、プログラム①との連続性を考慮しながら、発達の段階に合わせて、体系的なプログラムとなるようにしている。

プログラム③<将来の親世代(中高生・青年等)向けのプログラム>については4つのテーマを設定している。特に、将来の親世代に社会性を身に付けたいという意見が出されていたので、大人としての自立という点についても配慮している。

プログラム④<祖父母・シニア世代向けのプログラム>については3つのテーマを設定している。祖父母としての役割だけではなく、地域の中で子育ての先輩として、シニア世代のよさを生かすようなテーマを設けている。

プログラム⑤<地域住民向けのプログラム>については3つのテーマを設定している。親子だけでなく高齢者などが孤立しがちな現代社会の状況から、地域でのつながりを見直していきたいという願いも込めている。

委員 具体的なプログラムは対象者で変わるが、プログラム全体を「親学び」という単語でまとめてよいのかという思いがある。「世の中学習」というか「大人学び」というものの中に、「親学び」があるのではないか。

将来の親世代や祖父母にとってはリアル感がないので「親学び」という言葉では飛びつかないのではないか。全体を「大人学び」とするなど、ネーミングを考えていく必要があると思う。

事務局 前回までの委員の皆様からの意見を踏まえて、今回「みやざき 地域ぐるみ家庭サポートプログラム」という名称を提案している。内容に合致するネーミングについてもご意見を伺いたい。また、プログラムに用いる素材についてもお聞かせ願いたい。

委員 11月に開催された九州ブロック社会教育研究大会の討議の中で、「子育てが終わった人は子どもに関わらない」という意見が出された。

宮崎県のプログラムには、シニア向けのプログラムが入っていることがとてもよいと思っている。「大人がモデルになる」というような学びが大事だということから「成熟した大人になるためのプログラム」といった、参加したくなる、自分の勉強になると思えるようなネーミングにしてはどうだろうか。

議長 宮崎ならではのプログラムを考えるときに、自然を中心とした、子どもを取り巻く環境を重視したプログラムに力点を置くとよい。

委員 将来の親世代（中高生・青年等）向けのプログラムは、直接学校で活用した方がよいと思う。プログラム①と②を子ども向けに変えた形で道德の時間などで活用できると、親も子も同じことを学びつつ、地域とのかかわりにも関心が持てる。

このような講座にあまり参加しない親に出てきてほしいし、伝えるべきだと思うが難しい問題である。

20年後を見据えて、今の子どもたちに生涯学習の意義を教えるという意味で行っていくと、将来の参加者が増えていくことになる。

義務教育の中に社会教育はなかなか踏み込めないところもあるが、そこを意識して、プログラム①②は変形すれば子どもたちに使える気がする。

地域との関わりのプログラムは地域の実態が違うため、難しい面も考えられる。プロの指導者を育てると仕組みが整い、具体的に動いていく。



委員 今日のような講座になかなか参加できない人が多いと思う。その人たちをどうするのかは、これからの手法になるので、この点を加味していく必要がある。参観日にも来られない人へどうアピールしていくかも考えていくとよい。

10年、15年後を目指して、当面は指導者を育成し、段階的に広げていくとよいのではないかと思う。

委員 中学校では、技術家庭科の中で家庭生活について、保健体育科の中で「命」ということについて学習する機会がある。子どもたち向けのプログラムができると活用も考えられる。校長会等でアピールして、理解を得ることが必要だと思う。

将来の親、よりよき社会人になるための教育をしなければいけないと切実に感じているので、どの先生にとっても取り組みやすいものをつくっていく必要がある。

委員 プログラム③の「家族の一員として」というテーマはとてもよいと思うが、内容についてはジェンダーへの配慮が必要だと思う。

就学時健康診断には多くの親が集まり、講話を聞く機会がある。こういう機会をイメージしたプログラムをつくるとよいのではないかと思う。

副議長 「親である」とか「母親である」という、強制力をもってしまうと苦しくなってくる人も出てくる。参観日や家庭教育学級にもなかなか参加できない人は、批判の対象になるが、実は苦しい立場に置かれているのかもしれない。そういう人たちを巻き込むような、支えられるようなプログラムという点で、名称の変更はよかったと思う。そういう点でプログラム④と⑤は祖父母や地域で子育てを支えていく、子どもの育ちをみんなで応援していくという点が良いと思う。強制力をもたずに、自然に周囲が支える温かいプログラムということで、宮崎県版ができるとよい。

先ほども意見が出たが、プログラム③の「家族の一員として」のプログラムは私も気になった。「家事・育児は女性の仕事ですか」ということが出てくると、逆にジェンダーバイアスが強調されてしまうようなところがある。また、結婚という言葉も出てくるが、結婚しない人生も今はあるので、みんなの人生が含まれているような、あまりプログラム名を限定しないで、みんなが幸せになるようなプログラムがよいと思う。

最終的には、苦しい立場に置かれている、批判の対象になるような人たちを支えられるような視点をもつことが大事だと思う。

委員 祖父母の力を生かそうとした時に、それを生かせる仕組みが整っていないといけない。やろうという気持ちが高まったときに、どこに行けば対応できるか、プログラムの中に示せるとよい。安全対策については、子ども会やボーイスカウト、ガールスカウト等が持っているノウハウを生かすようにするとよい。

テーマ2 青年の活力を生かした社会教育活動の活性化について

■ 青年の潜在する力を発掘するための「人材育成」と「ネットワークづくり」はどうあればいか。

議長 リーダーの発掘・人材育成については、今回は青年層に重点を置きたいと思う。新たな青年リーダーの発掘や人材育成には、どのような支援を行えばよいか意見を伺いたい。

委員 青年活動を生かすための県のこれまでのプログラムがあったら教えていただきたい。

事務局 平成13～18年度に「若人ひむか活性化塾事業」を実施していた。この事業を通して、青年リーダーの育成を行ってきた。事業が終了して7年が経過しているので、新たなリーダーの育成が必要だと考えている。

委員 専門高校の教員を長くしているが、高校の地域との取組はとても盛んで、私の学校の生徒も市街地活性化の取組に参加してほしいということで、昨年からずっと参加している。

高校生になると地域活性化事業等への参加依頼がある。

農業高校だけでなく商業高校も盛んだと思うが、そういう若者達の実態をよく把握した上で、そこで活躍した若者達の活躍の場を提供してあげるとつながるのではないかと思う。私の学校の生徒も、楠並木の朝市に年間10回ほど参加している。子ども達がいると売れるからと要請されて行っている。スタンプラリーを企画したりして一生懸命やっている。このような場所で、子ども達が社会性を身に付ける。



本校生徒の6割以上が進学し、地域の大学、短大、専門学校に進むケースが多い。地域に残る可能性が大きいので、そういう子ども達を対象にして、加入させるようなシステムがあると意外とつながるかもしれない。

議長 県内の高校で同じような視点で子ども達を見ていくと、地域の子も達は多くなる。校長の経営姿勢によって、地域に出向いての教育活動が変わるのだろうか。

委員 基本的に専門高校は地域と連携することが使命なので、どこの学校でも行っていると思う。農業クラブの全国発表を見ると、地域の問題を解決するためにもものすごい努力をしている。いろいろな活動をした子ども達がいるが、卒業後の受け皿がないと、なかなか自分では見つけきれない部分があると思う。そのような手立てがあるとよい。

委員 これまで関わってきた地域の成人式では実行委員会が立ち上げられていた。その中に成人する若者達が入ってプログラムの第2部を企画し、当日の運営もスタッフとして関わり、自分達で司会進行もしていた。

成人式実行委員会は殆どの地域にあると思うので、そことリンクしたら、青年の人材発掘という面で有益ではないかと思う。

議長 実行委員会が立ち上がると、成人式のあり方も全然違う。

委員 先ほど紹介したのは、例えば農業高校の農業という視点で考えたときのボランティア活動のあり方の中での地域との連携であり、商業高校は、商業という視点で地域活性化をやっている。

高校にはボランティア部があり、高文連の全国的組織になっている。私の学校でも何百人もボランティア活動に参加する。青島太平洋マラソンには200人近くが参加する。高校生は意外と地域に還元している。たくさんのボランティア活動に、各高校からの生徒が参加していると思う。

ボランティア活動は、一つ一つがバラバラになっていて関連性がないので、どのような子ども達もどのように活動しているかは把握できない。一時、ボランティアをすると入試の時に有利になるということもあったが、最近の子ども達の意識は、そういうことではなく、もっと根付いているのではないかと思う。そういう子ども達がいるということも認識した上で、うまく把握していければと考える。

事務局 何歳ぐらいを対象にするか、非常に重要なところだと思う。今、高校・大学を含めて、活動が盛んになっており、地域社会に貢献している。

現在、青年団に入って活動する人が減っている。活動そのものも、かつてに比べると縮小傾向にある。今のご意見のように、昔は学校を卒業して社会人になってからも地域に残り、地域密着型の活動を通じた青年の自立や社会貢献が青年期に必要であった。時代が変わり、青年の活動が分散化・個別化している中、青年達が自ら青年教育をしていく力が希薄になってきていると感じている。その支援のあり方について検討していただきたい。

委員 人材育成という立場から考えるときに、全くゼロから始めるのではなく、高校時代の経験がある者を把握する方策が取れないかという考え方である。経験した子ども達はモチベーションが高いので、意外とリーダー的資質を備えているのかもしれない。しかし、いろいろなところで活躍した子ども達をステップアップさせる、青年期のリーダーとしての枠組みの中には、入っていけない可能性がある。高校時代に活動していた子ども達をつなぐような県としてのバックアップがあるとよいのかと思う。

委員 青年を活性化させると地域を引っ張っていく力になれる。この事業の必要性はよく分かる。若人ひむか活性塾がなぜ衰退したのかを詳しく教えてほしい。過去に学んで、今回は何が必要か考えていきたい。

議長 綾町ではこの事業に参加した青年が今、青年団・SAP・商工青年会等4団体でつくった若人会のリーダーをしている。リーダーは育っている。彼の周りに若者達が集まり、いろいろな事業展開をしている。十分効果はあったと思う。

事務局 若人ひむか活性塾では、近隣の市町村の青年団等が連携して、同じテーマで活動していた。また、県内各地の青年団等が集合して、自分たちの取組を発表する大会を開催した。成果は上がったが、数年経つと世代交代により下火になった。今回は、高速道の開通に伴い、宮崎県が大きく飛躍する時であり、地域に元気を出す中心になるのは若者だと考えている。

委員 五ヶ瀬町の青年団の現状を参考になると思うので報告する。教育委員会管轄の青年団は縮小傾向にある。商工会青年部やSAP、消防団もあるが、これらは役割があって組織されている団体である。これとは別に、地域づくりの団体が同時期に立ち上がっている。

坂本地区では「バックステイ」という、林業の若い後継者達がグループをつくりコーラスで地域を盛り上げている。

鞍岡地区では私が「祇園祭り盛り上げ隊」を結成した。屋台を中心に祭りを盛り上げるグループで、いろいろな祭りに出かけて、大工の若手が作った組み立て可能な屋台を持ち込み、楽しみながら活動している。

「こがらす会」は合コンのような活動をしている。このように、活動が細分化して潜在化している。

「G音楽隊」は五ヶ瀬役場の若者を中心に吹奏楽の公演活動をしている。

和太鼓グループ「流虎」には若手が集まっている。活動や地区ごとに組織が多数存在していることは、教育委員会よりも地域振興課の方が把握している。

一方、日之影町の青年団は活発で、クリスマスにサンタクロースになって家庭にプレゼントを持参したり、草刈りを請け負ったりした収益で、他地区の青年団と交流している。

潜在化している団体は確かにあるし、やる気のある青年は大勢いるので、一石を投じて一人リーダーが見つかると思う。リーダーさえ見つければ意識して新しいこともできる。

五ヶ瀬町は良い感じでメンバーが増えてきた。みんなやっているから、やらなきゃという気になっている。最初に仕掛けたのは、UターンやIターンの若者で、他の地域を見て、これではいけないという強い意志をもっている。縛りがないから自由にできる。各地に実は団体が潜んでいるかもしれない。

議長 そのような団体を知るとヒントになる。それを事例として広げることができる。地域が人を育てるので青年活動は地域に根ざした事業でないと持続性がない。地域密着から広域へと広げていくことができる。

委員 成功事例を発表する機会があるとよい。

委員 これまでにも、生涯学習の拠点づくりとコーディネーターの育成については意見が出されていた。拠点があれば、高校生が他校の情報を収集したり交流したりすることが可能になり、地元への就職活動にも有益な情報が得られる。

地域では拠点があって交流が行われ、広域では各拠点のリーダーを集めて、各団体の活動をアピールするような大きなイベントがあるといいのではないか。ユネスコスクールというものがあるが、これに参加すると宮崎県を世界に発信する機会になる。

委員 私の学校の教育方針の根幹は、農業と地域産業の育成・地域文化の伝承の三本柱である。農業高校の置かれた教育的意義でもある。以前は農家の方も多く、高校を卒業するとSAPに入って地域活動に取り組み、地域に貢献してきた。これからのSAP活動がさらに活発になることを期待している。

現在、親が農業を営んでいる生徒の割合は全生徒の一割に満たず、専業農家は極少数だが、地域に残って地域を支える人材を育てることが農業高校の使命だと思っている。高校生の意見が聞きたいということで、中心市街地活性化の話し合いに参加している生徒もいるが、その経験が地域を考える大きな機会であると思う。その子どもたちは、次のステップに進むための受け皿がわからないのではないかと思う。

委員 東日本大震災の時、地元の若者、特に高校生達が市長に要望したことは、集って話し合っ連携をとるための施設を準備してほしいということだった。彼らはやる気もあるし、潜在能力もあるので、あとは集うためのプラットフォームを求めているのだということを感じた。いろいろな人が交流できる仕組みが地域に必要なと思う。

委員 今の若者は選択肢が多いので、趣味嗜好で様々なネットワークがある。それが大きな組織になるとき、誰が旗を振るか、その人材がいない。以前は、いろいろな団体で、指導者の育成が自然に行われていた。人材育成には時間がかかるので、まずは人材が集まるための拠点施設が必要である。県は社会教育の重要性を市町村に説いてほしい。

事務局 社会教育が根底になれば地域づくりは進まないと思っている。青年達が自ら考えて自ら何かを興してくような力量を身に付けることが大切である。

議長 拠点づくりが大切である。綾町では地域でリーダーを育てている。そういう土壌をどう掘り起こすか、住民の意識をどう高めるかが課題である。次回からはもう少し掘り下げたい。最後に副議長にまとめをお願いします。

副議長 協議1については、プログラムを使った講座の参観をもとに具体的な議論がされた。プログラムの趣旨や内容についても議論が深められた。これまでの議論が反映された形で、みんなのためのプログラムとなるようなネーミングと内容について次回議論することになる。

協議2については、高校生等の若い世代から地域づくりに引き込んでいくべきだという議論の中から、青年を対象とした事業は、青年を引き出す仕掛けづくりであるということ、過去の事業も有効的であったということから再度進めるべきだということ、潜在化している人材が数多くいるということで、事業を通して掘り起こしができるということを確認した。事業の内容としては、拠点づくり、リーダー育成の必要性について議論が行われた。この議論は、昨年度の提言の「人材の地育地活」「プラットフォームづくり」に沿ったものであると思う。その第一のステップとして青年層を対象とした事業を進めていくことだと思った。社会教育として行うことの必要性、地域で人材を育てるといふことの大切さについても議論された。

議長 次回さらに協議を深めていきたい。

(終)